



Salamander
in
the circle

第七章

メッサナからの逃亡

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

ヤスウ・・・・・・・・・・ ネウトラ評議会・学術調査団の団員
ハイヤーン博士・・・・・・ //・・・・・・ ・本部科学者のリーダー
ティコ・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・本部科学者
ナシル・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・内勤職員
メルノ・・・・・・・・・・・・ メッサナの音楽学校の生徒
スクナ・・・・・・・・・・・・ 世界の果ての島の王に仕える者。コタエの兄

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・・・ //・・・・・・ 団員
ホシナ・・・・・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
マミヤ・・・・・・・・・・・・ホシナの娘
オマキ・・・・・・・・・・・・ホシナの妻
ゴン・キト・カボ・・・・ホシナ族の男たち
レル・・・・・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・王女
パウル・・・・・・・・・・・・ケストル王国・国王
ウルリク・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・第三王子
ヘンリク・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・ヘンリクの息子
ソルド・・・・・・・・・・・・ //・・・・・・ ・警備隊長
サノヒコ・・・・・・・・・・島の王に仕える役人
コタエ・・・・・・・・・・・・島の王に仕える女官
バイスロイ・・・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子
パンテオラ・・・・・・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・・・・・・総督の顧問
バラム&バランケ・・・・双子のジャガー。パンテオラの部下

目次

メッサナからの逃亡

112.

113.

114.

115.

116.

117.

118.

119.

120.

121.

122.

123.

124.

125.

126.

127.

128.

129.

第七章のあとがき

奥付

メッサナからの逃亡

112.

ひとつの歌がメルノの人生を一変させてしまった。人々の心をとらえて離さなかったあの歌への評判はしだいに変わっていった。共感はずっと徐々に退き、ついに正反対の、反感と嫌悪にまみれた罵倒へと。

なぜそんな変化が起こったものか、だれも説明できない。

犯罪者でもないのに身の置き所がなくなったメッサナから、メルノを脱出させようと手をさしのべ、あなたの仲間だ友だちだと名乗った人々は、ひとり、またひとりと消えていった。物理的に消えていったのではなく、気持ちがほどけていったのだ。

不和、不信、薄れていく関心、緩んでいく絆を目の当たりにすると、どこからか呪詛の響きがやってくるのを、メルノの芸術家の感覚はとらえた。

彼女はついにひとりになった。

どこともしれぬ土地の、じめじめとした湿地帯で、信頼していた最後の仲間の裏切りにあい、置き去りにされたのだ。

それは彼女の心を折り膝を折るのに、十分な仕打ちだった。地面はどこまで行ってもぬかるむ。足は泥にとらわれ、ひと足歩くのに気をふるい立たさねばならない。周囲は常に、昼も夜も、霧に閉ざされ、太陽を見なくなって久しい。月も星も見えない。方角や時を知るすがすがしさが、まるっきりない。せめて立ち止まって体を横たえたいが、そうすれば生ぬるく腐敗臭のする泥が口や鼻から侵入し……

あまりに、理不尽だ、と彼女は思った。

アンベレオ王国自治領メッサナ。地上にこれ以上の理性はなかろうという知と美の都市。魂の求めるまま、学徒たちの才能はここで花開き、実を結ぶ。メルノはそこで音楽に身をゆだねる学生だった。

かつてこの地を襲った天変地異。大波に吞まれた土地、破壊された生活、引き裂かれた人生を、誰かが詩につづり、誰かがメロディに乗せた。すでに古典となっていたその歌はこの時代の人々の魂に深く刻まれた傷でもあり癒しでもあった。

メルノは感じるままに己の体を通して歌を表現した。

彼女の演奏は多くの人々の知るところとなり、心をとらえた。ところがやがて彼女の周囲に異変が起こり始めた。少しずつ、少しずつ、友人が、家族が、彼女との間に距離をおき始めたのだ。それはやがて彼女と曲を非難するものへとかわっていく。曲に心酔していた人々は手のひらを反すように糾弾し始めた。いつしか人々はメルノを魔女とさえ、呼ぶようになった。

私が何をしたのか。何ゆえにこんな不快な場所であてもなく彷徨わねばならないのか。

泥のなかには時折硬い石が混じり、踏んばろうと足に力を込めた際に爪が石に引っかかった。気持ちの悪い鈍痛。爪が剥がれたらしい。顔は跳ね上がった泥だの汗だの鼻水だの、どろどろ、そこに長い髪が乱れて張り付き、両手の爪はかきわけた泥がつまって真っ黒だ。

そういえば、笛をどうしただろう、とふと考える。なめし革の袋に入れ、常に身につけていた、ヒスイの笛。祖母からの贈り物だった笛を、いつの間にか失くしてしまった。失くしたのはそれだけではない。なにもかもだ。泥は悪意でもあるかのように彼女にまとわりつき、衣服をおおかた剥ぎ取ってしまっていた。

なにもかも……？ と彼女は自問する。そして、いいえ、と自分に応える。まだ残っているものがある。誰かが名前を呼んでいる。最初は仲間の誰かかと思ったがすぐにそうではないとわかった。仲間はすべて同性、女だった。しかし呼んでいるのは男だ。ふと自虐の笑いが頬に浮かぶ。仲間でなければ追っ手かもしれないではないか。そう。彼女は追っ手の存在を感じていた。なぜ。誰に。それはわからない。ただ遠くから名を呼び目で追う、その視線を感じていた。だから、逃れたかったのだ。

もう、放っておいて

罵倒も裏切りももうたくさん

ただ私の名をつぶやいて、

ただ遠くから目で追っている、そう感じさせて、あなたは楽しいの？

泥から朽木の枝が突き出していて、一羽のカラスがとまっている。しばらくぶぎまにあがくメルノの姿を眺めていたが、やがておもむろに羽を広げてばさりと羽ばたいて舞い上がった。ねぐらへ帰る時間だった。

夜が、来た。

113.

メルノの体力も精神力もとうに尽きていた。しかし彼女は泥の中を這っている。霧が流れる闇夜をびちゃりぐちゃりと音をたてて這いずる様はまるで妖怪だ。もはやなにも感じず、なにも考えていなかった。しかし体は動いている。何かが彼女にとり憑いたかのように、ぎくしゃくとした動きで、手足を動かしている。

彼女はいつしか、自分の姿を見おろしていた。暗闇の底で友から仲間から見捨てられ、のろのろと地を這う憐れな生き物。

やむを得まい……と誰かが言った。かわいそうだがいたしかたあるまい……

気づけば、いくつもの気配が周囲にある。闇を這う白い生き物を見おろす、いくつもの気配。

あれは、あそこでのたうっているのは、私？ いいえ。ちがう。私はあんなにちっぽけじゃない。あんなに惨めで憐れなのが私であるわけがない。でも——あれは、私？
いくつもの目に晒され、見おろされ、相手にされず、見捨てられ、あれは——私だわ
——

目がかすみ、涙が頬を流れ落ちた。ふっと胸に灯った感情はみるみる大きく激しくなって全身をがくがくと揺らした。

彼女を支えようとしてくれた人たちはみな、親切で優しくかった。

「あなたのせいではない」

「あなたはなにも間違ったことはしていない」

「わたしはあなたのみかた」

そう言って、抱きしめてくれた。

しかし、その人たちに同じ危害が及ぶ恐れがあった。巷の空気は急速に異様なものへと膨れ上がりつつあったのだ。メルノは支援を固辞し続けたが支援者の心を変えることはできなかった。支援者たちは当人の意思でメッサナ脱出に心を砕き、骨を折ってくれたのである。が――

メッサナ郊外で、メルノはひとり放置された。

しばらくは、あの人たちになにがあったのだろうと心配したが、最後に周囲に残っていた支援者たちの会話から、内輪揉めが起こっているとわかっていた。すでに戻る術もなかった。

泣くまい、弱音も愚痴も雑言もいっさい口にはすまい、考えまいと歯を食いしばってきた。張りつめていたものが唐突に切れた。

口をついて嗚咽が漏れ、くずおれた場所を力任せに手の平で叩き、動物が咆えるように声を放ってメルノは泣き叫んだ。手が血にまみれ、喉が破れそうになるまで彼女は荒れ狂った。彼女はそういう自分自身に驚いた。こんなに激しく生々しい感情を持っていたことに。

だが、どんなに泣き叫んだところで彼女の声はその白い生き物には届いていないことに気がつく。彼女はなおもすすり泣きに体を震わせながら、あの白い生き物を抱きしめてやりたいと思った。憐れでかわいそうな自分を慰めてやりたいと思ったのだ。

が。

それはならん、と、誰かが厳しく制した。メルノは、きっ、と振り仰いだ。反射的に反発した。「なぜ!？」上から来た声と目線に、目がくらむような怒りを覚えた。

「何故……と？ 理由はいくつもある。知りたければ、ひとつを教えよう。そなたには

あの者を保護する資格がない」

「あの者を、保護する、資格？ おかしなことを言わないで！ あれは私よ！ 自分を抱きしめてやるのにどんな資格がいるというの！」

周囲がざわざわとざわめく。いくつもの気配は気のせいではなかったのだ。厳しい声の主がざわめきを『手』で抑えた。

「あの者はそなたではない」

「……」

「そなたの子だ。そなたが産んだのだ。水の精霊よ、あまりに昔のことで忘れてしまったのか。そなたには地上に生きる生き物の命を守護する役目があった。我々はその役目をそなたに与えた。しかしそなたは我々の眼をかいめぐり、異なる族の精霊と恋に落ちた。そして子を成したのだ。それがあの者であり、そなたはあの者の母親である」

「——なにを言ってるのか——わからないわ——私は水の精霊なんかじゃない。人間です。子どもを産んだ覚えもありません——」

メルノは呆然とつぶやいたが、相手は取りあおうともせずに言葉を続けた。

「異種族同士の婚姻は禁じられている。異種族の間に生まれた子は時に爆発的な力を持つからだ。あの者は生まれ出でたとたんに見事に証明した。あの者がぐずったために、世界の半分が燃えてしまったのだ」

そんなばかな、とメルノは思った。赤ん坊がぐずったから大火事になったなんて、まるでおとぎ話ではないか。

「我々全員の一致した考えは、あの者は存在してはならぬ、ということだ。しかし我々として神の端くれ、血も涙もある。命を取り上げようとは考えなかった。ただ、あの者自身に制裁を課した。すなわち、水棲動物の中に封じること——」

メルノは白い生き物に目をやった。

その様はまさに今の彼女の境遇そのままだ。いや、あまりにも近い。

メッサナ出身のメルノは黄金色の肌と黄金色の髪を持っている。だから暗い泥沼に手足を突っ込んで這い回るのを上から見おろせばあんなふうに見えるだろうと思い込んでいた。

周囲に大きさを比較するものがなかった、ということもあった。

しかし、水棲動物、と聞いて、よくよく見れば、それはイモリの形をしていた。

「そして——名を持たせぬ、ということ。そのふたつの制裁を負って、あの者は遠い時代に世界の果ての島へと追放されたのだ」

114.

メルノは呆然としながら、声の主を仰いだ。「名を持たせない、ですって？ どういうこと？」尋ねたわけではなく、つぶやいただけである。つぶやきながら、名前がない、ということ想像してみようとする。

——できない。そもそもメルノは自分が使うスープ皿や髪をとかず櫛にまで名前をつけていた。愛着ゆえだ。無機物にも精霊は宿る。名を呼べば彼らと心が通い、メルノは

幸せな気分になったし、彼らも幸せそうだった。名前がないなんて——しかもあの者はお皿や櫛ではなく、生き物だ——名前がないなんて、考えられない。

「なんて——残酷な——」

そのつぶやきから長い間をおいて、返事が来た。

「そなた自身、水の元素霊であれば、元素霊らの特徴というものが死角になっているのかもしれない。よく聞くがよい。元素霊はひじょうに賢く、人間にない力を持ち、人間の役に立ちたいと思っている。人間の役に立つことは彼らの大きな喜びなのだ。それゆえ、魔法使いらは元素霊の名を呼び、賞賛し、力を貸し与えよと請う。ところが元素霊自身には、善いものと悪いものの区別をつける能力がない。

名を呼び、賞賛した相手が誰であろうと、与してしまうのだ。それがどういうことか、わかろうか。たとえば、人間界から遠く隔った地底に居場所を与えられたあの、火の魔物が、大きな力をもつ元素霊の存在を知ってしまったら——」

「……………」

「我々はまがりなりにも神と呼ばれる者、地上に生きるものの苦しみも悲しみもわかってやりたいと思う。そなたの母としての心情も酌んでやりたいと思う。であるからこそ、あの者の命までは取り上げはせぬ。あの者の本性を想像すらできない生き物に姿を変え、名を持たせない。これは我々の出来る限りの譲歩である」

憐れみからか怒りからか、体が震えて仕方がない。

(それは——命を取り上げられるよりもなお残酷な仕打ち——)

メルノは両のこぶしを握りしめていた。くいしばってむき出した歯の、奥歯ががちがちと鳴る。彼女はおそろしい形相をしていた。メッサナの裕福な家庭に育ち、音楽家を志した少女の面影はもう、どこにもない。

何も信じられない、と思った。

傍らにあって神を自称するこの『人』も信じられない。その態度からも言葉からも温かみひとつ感じられない。神とはこれほど非人間的なものなのか。死神とどこがちがうのだ。えげつなく愛想よくすりよってくる死神のほうがまだ人間味も親しみもあるというものだ。

私は何も信じない。神も人も何も信じない。メルノは全身でそう表明した。彼女の全身から不信の白い炎がめらめらと立ちのぼった。信じられるものは自分が抱く思いだけだ。暗闇にたったひとり置き去りにされたあの生き物は私だ。泣くこともできず誰からも顧みられることのないあの生き物は私だ。

異種族間の婚姻は禁止されている？ 誰かを愛することを神々は禁ずるのか？ 婚姻から危険な因子が生まれるのが問題だというなら、それをなんとかするのが神々の役目ではないのか？ 殺しはしないが能力も愛されることもなにもかも奪って放り出すなど、それが神々のすることか。自分らは安全な高所において下界を見おろし、愛の結果、罪を負った者に罰を与えるのが神々なら、私はそんなものは信じない！！

メルノはそう、激しく叫んだ。叫びながら、妙な感慨を感じる。自分がこんなに激しい人間だとは今の今まで知らなかったのだ。自分はこういう人間だったのか？ そういえば最前から彼女は名を呼ばれてはいない。そう……一度ならず、水の精霊、と呼ばれている。

「水の精霊よ、あらゆるものが変化する。人間、自然界、そなたら自身、我々もだ。み

な、成長し、変化する。あの者はその本性である巨大な火を鎮め、熟成させ、やがて人間の魂のなかに情熱という形で熱を注ぎ込む存在になる。それが我々の望みだ。しかし、それには長い長い、永遠のごとき時間と、多くの試練が必要になるだろう。水の精霊よ、わが子の成長を見守ってやるがよい。時間と試練を踏破した暁には、あの者は霊魂へと進化し、人の肉体を得ることも可能となる……」

115.

「おい！」と男の声。「おい！ あんた、しっかりしろ！」

眠くてたまらない。放っておいてください、と、メルノは口を動かした。つもりだった。しかし口が開かない。乾いた泥で固まってしまったのだ。手をもちあげて気持ちの悪いその泥をかきとりたいが、体に力が入らない。空気は片方の鼻からかろうじて体内に入ってくる。

「あんた、こんな泥沼の真ん中でなにやってんだ、どこから来たんだ、まあ詮索はあとでいいや、あそこでワニがこっちを見てるから」

ワニ——話に聞いたことがある。大きく裂けた口は、人の子供の背丈くらいも縦に、ぐわ、と開くという。中にびっしりと剣呑な歯が植わり、狙った獲物はかならずやひと噛みでその口中に飲み込まれるか歯に捕えられるのだと。メルノはそういう話もそういう動物も苦手だった。『ワニ』と聞いてぞわっと鳥肌が立って瞬間的に力がよみがえり、体を起こそうとした。

とたんに男が「う、うわ！」と奇声をあげた。そしてメルノの上に倒れこんできた。メルノのあばれた手が男の手を振り払ってしまったのだ。

「な、なにしゃがる、こんな足場の定まらねえとこであばれるんじゃねえ！　こらワニ！　こっち見るんじゃねえよ、あっち行け！　しっしっ！」

「い、いやああああ！」

「おれだっていやだ！！」

泥まみれでくんずほぐれつしているふたりをよく見ようと、泥の上に眼だけ出したワニがすいっと近づいてきた。

「きゃあああああ！」

「飛ぶぜ。つかまれ！」

「は、はい」

云われるまま、メルノは両手を相手の首にまわしてしがみついた。裸同然の恰好だったがそんなことは言っていられない。上方向への浮揚感とともに、体のほとんどが泥から抜け出たが片足が残ってしまった。驚くようなすばやさで、ワニが突進してくる。悲鳴をあげるメルノの細い腰をヤスウは夢中で引き寄せ、思い切りねじった。泥を引くメルノの足をワニの口が追ってきた。その牙はむなしく宙を嚙んだ。

相変わらず霧が巻いているが空はかなり明るくなって、周囲を見渡すことができた。メルノは絶句する。ワニは一匹ではなく、二匹も三匹も、向こうにはもっと、うようよといるではないか！

「あんた、こんなワニの巣の真ん中でなにやってたんだよ」

メルノは首を振った。

「——とにかく、きれいな水を見つけなきゃな」

116.

空気はじつとりと肌にまとわりつき、夜明け前の空は真っ暗だ。湿地帯はどこまでも続く。

（いったい、いつまで、どこまでこんなことが続くんだ！！）ヤスウは食いしばった口中でののしる。

夜間飛行なんぞやめとくんだったと後悔しても始まらない。両親とは二度と会えないだろうという現実は想像以上に堪え、彼の心を蝕む。一刻も早くダーヴェなりヒューダーなりと合流したくて無理をして飛び続けた。

長時間の自力だけの飛行で体力も気力も限界だった。どこかに着地して眠らにゃ、と考えていた矢先、沼に埋もれそうになっている人間を発見してしまったのだった。

やがて空がいくらか明るくなってきて、泥のむこうに青緑に澄んだ色を見て、ヤスウは心底ほっとした。飛びながらこっくりこっくりと舟をこぎはじめ、メルノの「もしも

し！？ 起きて！！」と叫ぶ声も耳に入らず、やわらかな水草の茂る水辺に胴体着陸してそのままびきをかいて眠ってしまったのだった。

メルノは水のない乾いた場所を見つけ、眠りこけているヤスウを引っ張っていった。歩く力も尽きたと思っていたのに、自分以外の人間を引っ張って動かすことができるとは意外で、そんな自分をちょっと笑った。

笑ってみると元気が出てきて、水辺に戻った。ヤスウが眠りこけている間に水を浴びようと思ったのだ。なにしろ、頭のとっぺんからつま先まで、泥だらけだ。

水は清らかに澄んでいて冷たい。まず両手を洗い、顔を洗い、口の中をすすいだ。吐き出した水に泥だかなんだかわからないものが混じっているのを見てぞっとし、何度も夢中で口をすすいだ。口の中がきれいになるとほっと息をついて、波紋のないなめらかな水面に、洗った顔を映してみた。

鏡の前に立った時、ふつう、そこに映るのは自分自身のはずだ。けれども……これは、だれ？

見慣れない、いや、見覚えのない顔が自分を見返している。メルノは思わず後ろを振り返った。自分以外のだれかが背後から覗き込んでいるのではないかと。けれども、だれもいない。メルノだけだ。

長い黒髪に、黒い瞳の、これはだれ？

黄金の髪と青い目は、この一夜のうちにこんな風が変わってしまったというの？

メルノは眉をひそめる。水面の顔もまた。

髪や目の色が変わってしまったというだけではない。黒髪黒瞳のこの娘の顔のつくりは、繊細な人形のようにすみずみまで丁寧に彫りこまれている。不審げに眉をひそめていても、清楚で、美しい乙女、とメルノはこっそりその顔を評した。わずかに開いた形のいい唇からはきれいにそろった白い歯がのぞいている。

不審な思いのまま、メルノは水に爪先を入れようとした。先夜、石に引っかけた親指の爪は、やはり剥がれかかって、浮き、皮膚との間に泥が入っているのを目にして鳥肌立ち、さらに眉をしかめて、水をかけて清め始めた。水がしみて痛さに思わず悲鳴があがる。かわいらしい声だ。メルノ自身の声はもう少し低い。

丁寧に傷を洗ってから、彼女は水の中に入った。水底は砂地で、少し歩くと腰のあたりまでの深さになった。そこで腰をかがめて首までつかる。乾いた泥で肌に張り付いていた衣は水をふくんで緩んでくる。それを破らないように注意しつつ、水の中で脱ぐ。ぼろぼろだがないよりでした。

こんなところで洗濯をしようとは思わなかったわ、と思いつつ、洗った衣を岸边から張り出している木の枝に広げた。

裸になってみると、からだもまたどこからどこまで繊細な曲線と曲面からできているのがわかる。てきとうなところがひとつもない。こんな娘を目の当たりにしたら、もしかしたら自分は嫉妬を覚えるかもしれないと思う。しかし、爪先の痛みはあきらかに自分のものだ。

いったい何がおこったものか、見当もつかない。他人が自分に乗り移ったのか、それともその逆だろうか。いずれにしてもこの娘は何者だろう。

117.

どこの誰ともわからない娘を沼の真ん中から引き揚げ、疲労困憊のヤスウは夕刻まで熟睡してしまった。目覚めかけてあれやこれや記憶が戻って、血の気が引く思いで飛び起きると、体の上には自分が使っていたマントが掛けてあり、娘はすぐそばで行儀よく倒木に腰掛けていた。

それから暗くなりかけた湖で水を浴び、ついでに魚を捕えた。陸にもどってみると枯れ木や枯れ枝が集めてあった。夜営をするなら火は必需品であるくらいの知識は、メルノも持っていた。逃避行中に得た知識であったけれども。だが、このあたりには恐ろしいワニもいなければ妖しい気配も感じられなかった。ケロケロとカエルが鳴き出す。互いに初対面ではあるけれど、平和な宵。

「おれの名はヤスウ」と初めて自分の名を名乗った。「ネウトラポリスから来た」

娘は目を見開いてヤスウを見る。「ネウトラポリス——そんな遠くから」

「うん。メッサナへ行く途中さ。あんたは、あんな沼でいったいなにを……いや、どこかへ行こうとしてるのかい？ たとえはずっと北のエウメロスとか、それとも、西のケストルとか？」

娘は黙って首を横に振った。

「じゃあ、メッサナへ？」

「いえ……私はメッサナから来ました。行く当ては……ありません」

ヤスウはあぜんとし、「こんな荒野のど真ん中で、ひとりきりで、行く当てがないだって!？」次いで途方に暮れる。どうすりゃいいんだ!？」

「えーと、ネウトラポリスは知ってるんだよな。世界の中立地帯さ。おれはそこの評議会の者なんだ」はたと思いついて、手首につけている輝石つきの革の腕輪を見せる。身分証明書である。「中立ってことは、誰の味方でもねえが、敵でもねえ。よかったら何があつてこんなとこにひとりでいるのか話してくれねえかな。おれはメッサナへ行かなきゃならねえんだが、あんたを置いていくわけにゃあいかねえんだよ」

娘は伏せていた目をあげてヤスウを見た。黒い瞳にヤスウは思わずどぎまぎする。

「いや、その、無人地帯にあんたみたいな子を置き去りにしたなんて評議会に知れたら、この腕輪、取り上げられちゃうんだ、それは困る、仕事にならねえ!」

「どんな仕事を？」

118.

「ああ……あんた、メッサナから来たって言ったよな。じゃあ知らねえかもしれんけ

ど、実は今、世界中がえらいことになってる。エウメロス王国は崩壊寸前、ネウトラボリスも、あの黄金門市までもが瓦礫に埋もれちまってる。死人もけが人も数えきれねえくらいで、そういう目に遭ってるのが世界中いたるところにあってさ……」

娘の中のメルノの意識は慎重に黙っていたが、驚きのあまり言葉が出てこない。メッサナを出た時も言い知れない異様な雰囲気を感じたが、よその国ではそんなことになっていたなんて！！

「そんなことになっていたなんて——」娘はようやく、そう口にする。「私は行く当ても何も考えずにメッサナを出ました。メッサナにいられなくなって、逃げ出したのです。ああ、悪夢のような泥沼とワニから助けてくださったあなたを信じて私の名前を言いましょう、私の名はメルノ、メッサナで音楽を学んでいた学生です」

「メルノさんていうのかい。学生だったって？ そんな人がなんでまた——逃げて来た、って？」

「” 可憐なひなぎくを摘んだ日のことを覚えていますか…… ”」メルノは歌ってみようとしたが、できなかった。胸がいっぱいになってしまう。あの美しいメロディが記憶を刺激する。メッサナの広場で、突然自分に向けられた蔑みの目、怒号。

ヤスウは、いきなり黒髪をかきむしるようにして頭を抱え、激しく体をけいれんさせる娘をみて慌てた。

「だ、だいじょうぶかい、あんた、メルノさん——」思わず立ち上がって焚火をまたぎ超え、震える娘の肩に手をかける。そのとたん——

ヤスウは自分に向けられる大勢の人々の、なんともいえない、歪んでいるとしか思えない、憎悪と侮蔑をはらむ拒絶の目を見た。観衆のまなざしと発せられる声に体を引き

裂かれる、彼はとっさにそう感じた。娘を通じてやってくるそのヴィジョンには明白な悪意と物理的な破壊力があつた。

「その歌から離れろ！ メルノさん！！」ヤスウは叫んだ。叫びながら娘の両肩をつかんで揺さぶった。「その歌は悪意の通路だ！ 離れろ！ 気持ちを向けるんじゃないねえ！ おい、聞こえてるのか！？ 助けてくれ、誰か！ コタエさんよお！！」

119.

やりやがったな

生まれ育った町を一目見てヤスウはそうつぶやいた。

予想していたとはいえ、ここまでやるかというくらい、ネウトラポリスの石造りの町は徹底的に砕かれ、廃墟になっていた。

なんの感慨も湧いてこない。

なんにも、感じねえんだなあ

まるで、他人事だ。

おれってじつは、ひとでなしだったんか

生家も、祖父と手をつないで歩いた通りも、居住区のマーケットも、何も残っていない。なにもかもが瓦礫の下だ。感情は麻痺し、思考は停止し、心も頭も真っ白。

泣くこともわめくこともできない。ただ、真っ白だ。

天罰ってやつ？ それにしたって、おれらがこんな目にあわにゃなんねえ、何をしたっていうんだよ——

どこかで、からっと乾いた音。瓦礫が崩れたらしい。なにげなくそちらを振り向いた

ヤスウは、瓦礫の陰から覗いている者と目が合った。

120.

「きみ、それ、評議会の制服？」瓦礫の陰から覗いていた目が、若い男の声でそう言った。

生存者！？

ヤスウは体ごと向きを変えた。

「そうだ。評議会のもんだ。あんたは！？」

若い男がそろそろと姿を現した。ヤスウと似たような服装をしている。評議会の内勤者の制服だった。

周囲は古い石の壁。二人の靴音が不気味に反響する。

「評議会本部の地下がこんなだったなんて――」

「大事な資料や文書の保管庫と、研究施設さ。しかし元々、シェルターとして作られた

んだ。我々のご先祖は火山噴火とか、何度も大規模な災害に遭ってるからね。地球上、どこへ行ったって人の住んでるところにはシェルターが備わってる。けど長いこと何も起こらなかったから保管庫と研究施設に使われてたってわけ。どうでもいいところはこんな具合に石壁のままだけど、肝心の内部は合金の内張りがされてて湿気を遮断してる。なんとかは忘れたころにやってくるっていうけど、まさかほんとに避難所に使うことになるとは思わなかったってハイヤーン博士が言ってたよ」

黒い縮れ毛のひよろりとした若い男……ナシルという名だった……の解説をいらいらと聞き流して、ヤスウは尋ねた。

「で、何人くらいいるんだ？」

「ここ？ 百人くらいかな」

「……………」

「東の河の向こうに別荘地帯があるだろ、おおかたはそっちへ避難してるよ」

ネウトラポリスはネウトラ評議会のための町。住民のほとんどは評議会の関係者だ。評議会をリタイアした者は町を去って別荘地帯で余生を送るのである。ヤスウは祖父母がすでに町に住んでいなかったのをようやく思い出した。

「な、なんだ、そういうことか！！」

が、安心するのははやい。ネウトラポリスは50万人の人口を抱える大都市である。

「巨人族は町の破壊が目的だったらしい。別荘地帯へ逃げた人たちは無事だよ。生存者は全体の二分の一だ」

「あとの二分の一は？」

「行方不明者、重軽傷者、死者」ナシルはためらいもなく、けろりと言った。あまりの惨状に情緒も感覚も麻痺してしまっているのかもしれない。

そして、この男も評議会地下へ避難した人々も、巨人の食料問題についてまだ知らない。

121.

ハイヤーン博士とは、数学者にして科学者、天文学者、生物学者。ほかに地質学、化学、医学、今日で言う自然科学の分野のあらかたは、博士の守備範囲。大学者なのである。白髪 of 総髪に白い顎髭をたくわえ、藍色の目は光が強く、大柄な身を荒い織地のローブで包み、エネルギーに動き回る。たいへんな高齢らしいが動作も声も、容貌も、生気に満ち溢れている。本人も周囲の人間らも学者だと言っているが、ヤスウの第一印象ではむしろ、魔術師だった。

「なんだと！！？」

博士はいきなり大声を上げた。ヤスウだけでなく、室内に居合わせた者全員がびっくりして飛び上がった。

「ダーヴェの調査団と言ったのか！？」

広い執務机に両手をついてぐいっと身を乗り出したので、古い木製の机はぎしっと鳴った。

ヤスウは思わず後ずさる。「ははははい」

「ダーヴェといえは……巨人族の調査に行っったはず……今までどこでなにをしとったのだ！！」

「え、えーとですね、第一章と二章と三章あたりにそこそこ詳しく載ってますんで読んでいただければ」

「そんな悠長なことはしておれん！ 手短にあらすじを述べよ！ 千三百字以内でだ！」

「ふむう——」大柄な博士の体重を受けて古い肘掛け椅子がぎしぎしと鳴る。

ヤスウは大汗をかいていた。なにしろ、自分の目で見えていないことまで説明しなければならなかったから。

「ええまあ、そういうわけで、おれ自身は肝心の巨人を見てねえんです。エウメロス王国の王都が襲われた時に居合わせたヒューダーが城の上空から見たと言っていました、おれはその時隣国にいましたんで」

「……レムリアンの亡霊……」

ヤスウにしゃべらせておきながら、博士はヤスウが持参した書簡に目を通していた。世界の果ての島を発つ際にヒューダーから託されたもので、此度の調査行の中間報告書だった。博士の研究室には十名ほどが詰めていたが、ナシル以外は博士を長とする研究員。いま、全員が博士のその言葉に顔を上げる。

「わがネウトラ評議会設立の発端となった事件を知っている者は？」

博士の問いに、みな、戸惑いの表情で首を横に振る。

「そうか、誰もおらんか。無理もない。五万年も前の話だからな。当時、人間は巨人族の脅威に怯えて暮らしていた。巨人族は肉食だったからだ。その意味がわかろうか」

博士は言葉を切って研究員たちの顔に目を当てる。

「は、博士、それはまさか——」

122.

「巨人族か、我々人類か、どちらが生き残るか。そういう時代があったのだ。巨人族とは、はるかな太古から数万年、数十万年を生き延びた強靱な種族で、地上に敵なしの状態が長く続いていた。彼らは赤道付近の亜熱帯の地域に住んでいたのだが地上の気温が上昇し始めたのを機に、冷涼な地域、我々の祖先の居住区域に移動し始め、そこに豊富な食料がいるのを知った。祖先らの抱えた恐怖が想像できよう」

「……………」

「我々の祖先はついに結集し、巨人族との対決に立ち上がった。知の粋が集められ、実に様々な案が出され、企てが試された。そしてもっとも有効な道として残ったのが、巨人族の未来を閉ざすことだった。生物としての巨人族の未来を閉ざす。不妊化だ。そのために強力な薬剤が開発された。恐るべき手段だったが効果はてきめんだった。巨人族

の勢いは急速に衰えていった――」

ナシルが目を輝かせて身を乗り出す。「巨人族をやっつける手段があったのだ！ それも五万年も前に！」

研究員のひとり、小柄でかっちりとした筋肉質の体型のティコという男が眉をひそめて言う。「いや、博士は『事件』と言われた。歓迎すべきことではなかったということでしょうか、博士？」

博士の秀でた額からは普段の自信の輝きが失せていた。

「強力な薬剤は巨人を不妊にただけでなかった。気候変動を誘発した。大気は荒れ狂い、地底ではマグマが活性化、いたるところで火山が火を噴いた。火山の活動はやがておさまったが、大気中に吹きあげられた噴煙が日光を遮り、長い冬の時代が始まった。ことここに至ってはもはや人の手でどうにかなるものではない。人類は地熱を求めて地下にシェルターを作りそこへ避難した。その名残がこの研究室というわけだ」

「そして今、その巨人族が復活したってことですか？」

話をするうちにすっかり意気消沈してしまったハイヤーン博士を問い詰めるようなナシルの物言いだった。

巨人族対人類の戦いのために世界中から集結した英知のグループはネウトラ評議会の礎石となった。輝かしい礎石であるはずなのに、その事実は地下深くに、人々の記憶から、隠されていた。かつてのその戦いこそが誇り高いネウトラ評議会の原点なのだと、胸を張って主張できることではなかったのだ。

123.

巨人族はネウトラポリスを壊すだけ壊してどこかで鳴りを潜めている。あるいはどこか別の場所を襲っているのかもしれない。人員も機材も大量に奪われて情報収集がまったくできていないのだ。だいたい、こんな天変地異のごとき災いを誰が予想できただろう。

評議会にはすべての王国の根幹にあって、中立の立場の下に世界中を見渡しているという意識が行きわたっていたが、それはとうの昔に驕りに転じていた。永遠に続く組織も権威もあり得ない。その斜陽の中、彼らは完膚なきまでに叩き潰された。それもかつて彼ら自身が未来を奪った巨人族によって。

部下、同僚、上司、友人、家族を見失い、彼らの日常そのものが混乱している。みな、自分のことで手一杯だった。

様々な意味で、二度と立ち直れまい、ハイヤーン博士はひそかにそう確信していた。

シェルター最下層の保管庫に潜って巨人に関する過去の資料をひっくり返した挙句、評議会の原点にまで遡ってしまった博士だったが、その記録はわりと最近……二年前に……閲覧されているのに気がついた。閲覧者はヒューダー。言語学者にして民族学者。所属はダーヴェ調査団。

そのヒューダー本人も団長ダーヴェも、復活した巨人の秘密を追っているというのが……ため息が出る思いだ。ネウトラ評議会に属する学者は数万人もいる。その中でハイヤーン博士の数少ない知己のひとりがダーヴェだった。片や石の館の地下で研究に没頭し、片や研究対象を求めて世界の果てまで飛んでいく。タイプはまるで異なり、祖父と孫ほど年は離れているが、博士はダーヴェの陽性を愛し、親友のように思っていた。

どこまでも飛んで行けるのはダーヴェが上級賢者でもあるからなのだが、その部下がこのちょっと軽そうな少年魔法使いヤスウと、ヒューダーとかいう言語学者。調査団員の組成を知ってため息がでるのである。果たしてこのふたりでダーヴェの補佐が務まるのか、と。

そう考えると居ても立っても居られない博士である。いらいらと立ったり座ったりしながらヤスウにかみついた。「とっとと団長を探しに行かんか！！」

言われなくたって、ヤスウは辛気臭い地下シェルターからとっととおさらばしたい。博士の配下の科学者たちが額を突き合せてなにやら相談を始めているのが気にはなる。が、専門用語の早口の会話はまるっきり、ワケがわからないので耳を傾けるのは諦めた。どのみち、自分のあずかり知る分野じゃあないし。

内勤職員であちこちのグループを行ったり来たりしているナシルが「動きがあったら知らせてあげる」と請け負ってくれた。彼の取柄は遠感能力だった。だったら、エウメロスのレルともやり取りできるかもしれねえじゃん、と思いつつ、別荘地帯へと飛ぶ。本部のシェルターに彼の両親はいなかったのだ。

思ってもみなかった孫の来訪に、祖父母は泣いて喜んだ。彼らもまたヤスウの両親の行方を知らなかった。もしや、本部にいるのかもしれないという淡い希望も絶たれ、そんな知らせを持っていったヤスウはいたたまれない。重苦しい気持ちのまま一晩泊めてもらい、体力を回復してからダーヴェとヒューダーがいるはずのメッサナへ向けて飛び立つ。気落ちした祖父母の顔を見るのがいちばん辛かった。自分の気持ちは空を飛びながら整理しようと思うヤスウだった。

そして、メッサナの北、数千キロあたりの湖沼地帯で、彼はその娘に出会ったのだっ

124.

「その歌は悪意の通路だ！ 離れろ！ 気持ちを向けるんじゃないねえ！ おい、聞こえてるのか！？ 助けてくれ、誰か！ コタエさんよお！！」

ふだんのヤスウなら誰かに助けを請うなど、考えられなかった。もともと、幸運にもこれまでそんな場面に出くわさなかつただけのこと、ダーヴェエやヒューダーに知らず知らずのうちに助けられていただけなのかもしれない。

(おれってただのお花畑野郎だったのか……)

自分の手に負えない、これはまずい、ヤスウは次々と覆いかぶさってくる悪意の真っ黒な巨浪に弄ばれた。こりゃあ、たまんねえぜ、と思った。この娘はこんなもんをもろに受けて、たったひとりで泥沼を這ってたのか――

信じてきたものがいっせいに向こう側へ行ってしまった。こっちには誰もいない。大勢の冷たい眼差しの下に己の尊厳のすべてを引きむしられ、踏みにじられる。恥辱と絶望の乾いた泥沼。

気が狂う ヤスウはそう思った。

どこともしれない湖のほとりで、狂って、野垂れ死ぬ。これがおれの一生だったのかしょうがねえなあ だって……もう、だめだ……もう……耐えられねえ……

観念の目を閉じた、その時。

ヤスウは自分の肩に手が置かれるのを感じた。コタエさんが来てくれたのか？ い

や、こりゃあ男の手だ——誰——

バチッ、という音とともに白光が閃いた。雷が落ちたような衝撃が周囲を揺るがし、真昼のような明るさに照らされる。まぶしさのあまり、ヤスウは肩に置かれた手の主を確かめようといったん開けかけた目をふたたび瞑った。

125.

ケロケロとカエルが鳴いている。小さな生き物の気配とわずかに波が寄せる水音、水の匂い。焚火の火がぱちぱちと小さく爆ぜている。湖のほとりの野営地は何事もなかったように平穏そのもの。

焚火の向こうに、誰かが蹲っている。湖を背にしたそのシルエットは男のものだ。

(コタエさんじゃねえのか。誰だ?)

ヤスウは娘を背後においてかばいながらゆっくり立ち上がって言った。「誰だ、あんた」

男の声が応じた。「そなた、先刻、コタエを呼んだであろう？ コタエのかわりに参った」

男は、つ、と立ち上がった。けっこうな大男で、背に何か背負っていて、肩の後ろから上の方へ何か突き出ている。ヤスウは反射的に警戒して後ずさった。

「その娘ごが何者かの注意を惹いてしまったようだ。ここにいてはいけない。すぐに移動する」

短くそう言うと、男はずんずんと大股に歩み寄り、ヤスウと娘の手を取った。一瞥しただけで焚火を消してしまう。次の瞬間には三名の姿は消えていた。すると鏡のように静かだった湖面が盛り上がって大波となり、野営の跡をきれいに拭い去ってしまった。

126.

いきなり周囲の景色が変わってヤスウはめまいを覚えた。ほとんど瞬間的な長距離移動だったようだ。

(こんなことはおれにはできねえ。たぶんダーヴェ先生にも。なんなんだこいつは)

空気は冷たく、夜空は澄んでいる。周囲は丈の低い草地。すぐ近くに高く険しく切り立った崖のような山のシルエット。それが空の半分を占めている。

「ここはいったいどこだい？」

「エウメロス王国領だ」、と男。

「エウメロス領って——だいたい、あんたは誰——」

ヤスウは袖を引っ張られて黙った。黙らせたのは黒髪の娘だ。「私たちを助けてくださいましたのですね。ありがとう」

「いやなに」黒い瞳にひたと見つめられて男は照れているように見えた。が、彼が目のやり場に困っているのは別の理由だった。娘の衣はぼろぼろに破れていて、裸同然だったのだ。一方、ヤスウは上等のなめし革のマントをかき合わせて冷たい空気に震えている。男はものも言わずに手を延ばし、ヤスウからマントをはぎ取って娘に手渡した。ヤスウはそれで初めて娘の様子に気がついた。

「ところで。そなた、妹とどういう関係か」そこはかたなく胡散臭げな目がヤスウに向けられている。

「妹……え？ あんたはコタエさんの兄さん？ コタエさんの兄さんがなんでエウメロスにいるんだ？」

「——巨人だ——」

「うむ。世界の果ての島から連れて来られたのだ。ダイドラボッチという」

レルと共にエウメロスへ渡ったコタエは、とらわれていたヘルガ王女とマミヤを取り戻し、その帰路、このあたりで遭難したのだ、と聞いてもヤスウにはどうもぴんと来なかった。その上、ひとりでさまよっていたダイドラボッチを発見したとは。

遭難した一行は一晚をこの地で明かし、すでに去った後だった。コタエとレル、王女は捜索隊と共にエウメロス王都へ、マミヤとイリチヤとはメッサナへ。

スクナはダイダラボッチの移送のためにここにとどまっていたわけだが、彼がいなかったら……そう考えるとヤスウはぞっとすると同時に不思議な縁を感じるのだった。

127.

「コタエさんの兄さん」

「スクナ」

「スクナさん、ちょいと相談なんだが……ほかでもねえ、あの娘をなんとかしてくれねえかなあ」

「メッサナという魔性の地から来たという、あの娘か」

「うーん、おれも死にそうな目に遭ったから魔性の地っていうのもわかるよ。けど、メッサナはそんなじゃねえんだ、おれ一度行ったことがあるんだが、明るくてからっとしてて、ほんと、美と知の殿堂って言葉がぴったしなところだった。だから大勢が寄ってたかって若い娘っ子をいじめ倒すなんて……とても信じられねえんだよ」

「……………」

「何か、起こってる。何か、とてつもなくおぞましいことが。巨人の侵攻に匹敵するよ
うな——とてつもなく——」

ヤスウはどこかでそんな言葉を聞いたような、既視感を覚えた。それ自体が技術と芸術の粋のごとき堅牢な石の都・メッサナには、外部からの侵攻に備えるという発想も機構もない。しかし侵略の意図を持つ者は物理的な力ではない、別の方法を考えるかもしれない——と。

「だから——」ヤスウはごくつと唾を飲み込む。「おれ、行かなきゃならねえ。メッサナにはおれの仲間がいて、巨人族の謎を追ってるんだ——」

ヤスウは身震いした。冷たい空気のせいではなく、気持ちの悪い汗が体中からふき出してくる。あの悪意の攻撃は二度とごめんだ。それでも、何が待っていようと、行かなければならない。ヤスウには世界の中立（ネウトラル）を代表する者としての責任と義務があった。

メルノは少し離れた草地に座って楽器をつま弾いている。スクナが背負っていたものだ。大男のスクナ用だから作りがかなり大きいのが、持ち主のスクナが驚くほど彼女は巧妙に楽器を操っている。もっと驚いたことに、ダイダラボッチが寄って行ってうっとり耳を傾けているのではないか。

こんなのは見たことも聞いたこともないぞとスクナは思った。ただ自分の楽しみのために弾いていた楽器にこんな効用があったとは。

スクナは慎重だった。なんとかしてやろうにも、彼の故郷ではトラブルが起きつつある。「そう——いっそ、ホシナのところなら——」

あそこなら多少毛色の変った者が紛れ込んでも目立たないだろうが——

「ホシナ族のマミヤには入国に待ったをかけているのにメルノはいいのか」

また、

「ホシナ族は他国の人間が入ってくることについてどう考えるだろうか」

スクナは居合わせる仲間を集めて話し合った。

「メルノは自国にて迫害され生命の危険にさらされて逃亡中の身だ。我らは国家としてその者を保護する。つまり亡命が成り立つ」

また、

「ホシナ族が他国の亡命者を受け入れるかどうかはまったくの未知数だ。やってみなければわからないが、危うい立場にある者をどのように扱うかで、彼らのメンタリティを押し量れるというものではないか」

様々な意見が交わされた。

なにより、彼らはダイドラボッチには馴染みが薄く、おっかなびっくりで接している。「こやつをなだめてくれる者がいっしょなら、我らとしては願ったり、ではないか」というのだ。そして、困窮している者を捨てておけないというのがスクナだった。

「うむ」とスクナは決断した。「ヤスウの話によれば、我が国からネウトラ評議会に派遣されている彼の親族も巨人族の被害に遭った公算が大きい。我が国も当事者と考えてよい。この事件の焦点はどうやらメッサナ市とその周辺。ヤスウはメッサナ市へ向かう途上でメッサナ市から逃れてきた娘と遭遇した。皆の者、これが事のあらましである。それゆえ、その娘ご、メルノどのの身柄、預かろう。ヤスウよ、そなたは心置きなく、存分に勤めをはたせ」

「お、恩に着るぜ、スクナさん、みなさんも！」

「さっきも言ったが我々も当事者なのだ。我が国の民に加えられた危害を捨ててはおけぬ。加害者を見出し、加害の理由をつまびらかにさせ、罪を償わせねばならぬ。巨人族らは我らを相手にしたことを後悔することになるろう」

スクナは威厳に満ちてそう断言した。ヤスウは思わず「へへー」とひれ伏したくなった。

「……てなわけでき」ヤスウはメルノに言って聞かせる。「このスクナさんがあんたを安全な場所へ連れてってくれる。そこはメッサナと違って、まあ、何にもねえところだから面食らうかもしれねえけど、とりあえず安全な場所だ。おれの祖国でもあるし」

メルノはためらっている。

ヤスウは彼女がメッサナで受けて来た屈辱の数々、反故にされた約束の数々をほとんど知らない。今ここで、助けてやろうと持ち掛けられたところで、彼女の中で起こる葛藤を想像することは無理な話だった。

「亡命……あの……私を信用してくださるの？」

「……おれはさ、メッサナの人間をみんな信じてる。みんな、自分の生まれ持った能力を存分に生かそうって頑張ってる。あんたもそうだろ？」

「……………」

「そうだ！ これをあんたにやるよ！」

「え、でも、これは——」

ヤスウが渡そうとしているのは革の腕輪、評議会の身分証明書だ。

「世界の果ての島に入る時に、身分を証明しろってことになるかもしれねえ。あんた、なんにももってねえだろ、おれが保証人になるよ。なに、おれのことは心配いらねえ。メッサナには知り合いが何人もいる。身の証なんざいくらでも立てられる。だからこれはあんたが」

「でも、そんな、見ず知らずの私のために——」

「まあ、そりゃそうだけど。けど、世界はこれからどう転ぶか、ぜんぜんわかんねえん

だぜ、おれたちはみんな、その瀬戸際に立ってるんだ。そんな時に会ったってことは、何かしら、縁があるんだろうよ」

ヤスウはメルノを安心させたくて笑いかけた。久しぶりに笑ったような気がした。

「メルノどの、亡命の条件、というか、二つほど約束してもらわねばならぬのだが」

「はい。スクナさん」

「そなたにとっては、辛い約束だぞ」

「——なんなりと」

「まず、歌ってはならぬ」

メルノはまじまじとスクナを見上げた。湖のほとりで歌いかけたとき、何かに繋がってしまった、そう直感した。直後に激しい発作に襲われ——ヤスウが叫んだ。「その歌は悪意の通路だ」と。

歌うことによって悪意を呼び込む。その認識をメルノが受け入れることができなければ、スクナ側も彼女を受け入れるわけにはいかない。彼女自体が爆弾のようなものなのだから。

メルノはスクナを見上げたまま、こっくりとうなずいた。スクナもうなずき返す。

「もうひとつ。そなたには追手がいたはず。追手を欺くために、今の名を忘れてもらいたい」

「異なる名を名乗れと？」

「さよう」

黒髪の娘の眼差しはスクナを通り抜け、遠くへと飛んだ。

「メルノという娘の体、音楽家の喉も、泥沼で猛獣に喰われ、骨も残さず、死にました。私を——」

彼女の目にはそのイメージがみえた。土から立ち上がったばかりの初々しい若芽。すらりと宙へ伸びる植物の葉。ゆるやかな曲線はどこまでも弧を描いて渦を巻く。生命の始まり。始原。そして——壮絶なまでに清新な、原初の水しぶき。

「ミツハ、と呼んでください」

129.

泥沼の上をカラスが舞っている。大きなカラス。悠々と翼を広げ、赤い目が獲物を探る。

しかし、見当たらない。獲物は夜のうちにワニに喰われてしまったらしい。

カラスには残念でもなんでもない。見張ることだけが彼の役目だったから。獲物はいなくなったというだけのこと。

ぐるりと見渡すうちに、ふと目に留まったものがあった。沼面に何か浮いている。

なんだろう

布の切れ端。獲物が身に着けていた衣の一部。

こんな物でも持ち帰れば証拠になるかもしれないと思い、くちばしで拾い上げようとしたが、沼の中から浮き上がって来たワニと目が合った。

喰われてはたまらん

カラスはつぶやき、布の切れ端はさっさと諦めて空高く舞い上がった。

カラスの行動は賢明だった。大きな獲物に逃げられて空腹かついらだっていたワニは鳥で我慢しようとして狙っていたのだった。

第七章 『メッサナからの逃亡』

第八章へ続く

第七章のあとがき

メルノの話は初回からの持ち越し、内容的にはほとんど変わっていません。変わったことといえば、スクナ兄上の救いの手が入ったことでヤスウがばたばたせずに済みそうってとこかな。いやいや、スクナもコタエもいきなり出て来た人たち、今回はともかく今後どれだけ変わることになるかわかったもんじゃないかたりして。

で、スクナさん、態度が大きい。なにしろ、兄妹の長兄は時の王のご学友、王の病弱の息子が王位を継いでからは王に変わって執政することになります。スクナ、コタエ兄妹が属する一族は当時政権の中枢を占めてたのです。

この章ではネウトラ評議会の科学者たちが登場します。まー、名前をつけるのに一苦労。最近の人のじゃなくてうんと古い時代から借りてこようとあれこれ調べていて、はて？ と思ったのが古代ギリシアの文化です。高校の世界史の教科書（ミネムラのじゃありません。家族のです）によると、『ホメロスの英雄叙事詩、ギリシア悲劇や喜劇、彫刻、華麗なパルテノン神殿などが名高い。また、ピュタゴラス、ユークリッドといった数学者、ソクラテス、プラトン、アリストテレスら多くの哲学者らが活躍した』古代ギリシア。世界史上、ひととき強烈な異彩を放ってるのですが、この古代ギリシアの知はその後、今の自然科学の基になってるくらいはなんとなくわかるけど、尻切れトンボみたいに歴史に出てこなくなる。どうしちゃったんだろう？

ざっと周辺諸国との関連含めてギリシアの歴史を追ってみると、紀元前500年ごろ、東方を支配していたアケメネス朝ペルシアと戦って勝利、この戦争の後、アテネとスパルタがポリス同士で主導権を争い、ギリシア全体が衰退、紀元前300年代には北方のマケドニア（←ギリシア人の国）に征服され、前148年マケドニアはローマの属州となり、前146年、ギリシアもローマに征服される、と。

ギリシア神話のギリシアは多神教でローマ帝国の国教はキリスト教。非キリスト教的学校であるアカデメイアは西暦529年、ローマ帝国の皇帝が閉鎖してしまいます。

さてアカデメイアは閉鎖、学者さん方は追放され、東へ、ササン朝ペルシアへ逃れました。このササン朝ペルシアは信仰も文化も多様に受け入れた国で、アカデメイアが閉鎖されて100年余り、ギリシアの知は実はここで保護され、今日の自然科学の基となったのですね。

ササン朝も西暦633年、イスラム帝国に侵略されます。そして。イスラム帝国のしたことといえば。イスラムのカリフはギリシア語による哲学・自然科学の書物の収集と、それらをアラビア語へ翻訳するための機関を設立し、当時世界最高峰の病院を建てたのです。それも1258年バグダードの戦いでモンゴル帝国に破壊しつくされてしまいました。破壊は徹底的で、なにも残さなかった（人も）、と。

その後、イスラム世界におけるギリシア哲学研究は衰退、完全に失われたものがある中で、それでも今に伝わるものもあるわけでね、なかなか感慨深いものがあります。

登場人物につける名前を探してあちこち渡り歩き、見つけたのがアラビアンな名前でした。ハイヤーンて、なんかエキゾチックでしょ。

2022年4月15日 記

奥付

Salamander in the circle

第七章 メッサナからの逃亡

2022年4月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
